

街道ネットワークがつくった奥三河山村文化のダイナミズム

輝いていた
奥三河

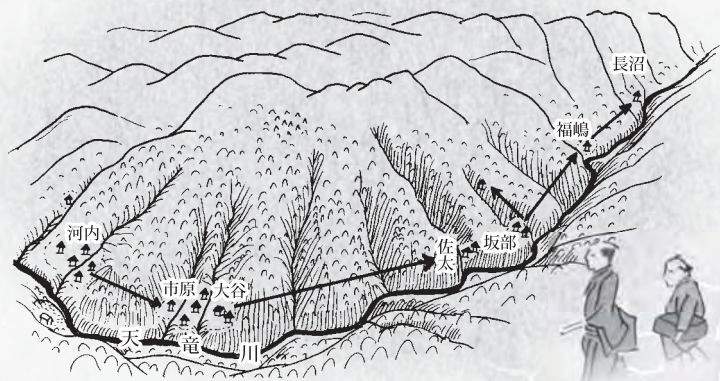
奥三河は中央構造線を利用して街道ネットワークが形成され、人・物・情報の交流がこの地に豊かな山村文化を生み出しました。縄文文化に始まり、熊谷家伝記にみられる中世の村づくり、長篠・設楽が原の合戦や、花祭り、木地屋、焼畑、近世の信州中馬や山湊馬浪の賑わい、はげ山から植林へ、金田家と古橋家、国学と知識人の道、近代の林業王国と郡有林、そして現代の人口減少下の「奥三河星座論」とジェントリフィケーションなど、奥三河の歴史的な輝きをひもとき、現代における奥三河の地域づくりの可能性を考えます。



中世「熊谷家伝記」

奥三河の中世から近世について村の成り立ちや動きを見る上で、「熊谷家伝記」は多くの情報を含んでいて参考になります。「熊谷家伝記」は、14世紀から18世紀にかけての奥三河から南信にかけての天竜川沿いの山地斜面に展開した土豪熊谷家一族の生活記録であります。都の出来事も逐一記録されており、決してこの山地が隔絶された辺地ではなく、むしろ独自の社会文化圏を形成していたといえます。

図1は、熊谷家が14世紀に旧富山村河内に本拠を構えて以来、一族の発展とともに100年をかけて新たな居住地を拡大し、「草分け」としての村づくりを行った系統分布図です。天竜川を望む急斜面の崖錐上の緩斜面を次々と順に開拓居住地とし、背後の斜面を焼き畑用地として利用していった伝統的な山地利用の様子がわかります。これらの村は今日も継承され、特に本拠地の河内は愛知県内ではもっとも古い存続集落といえます。



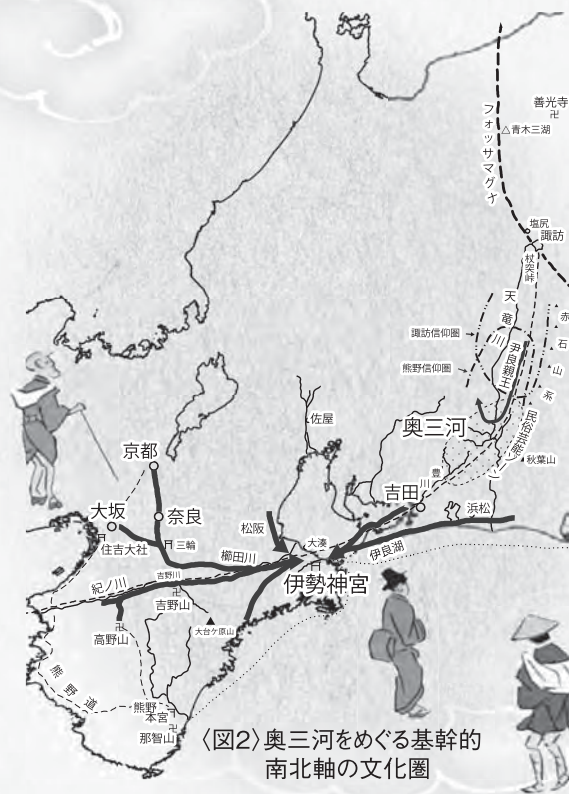
〈図1〉「熊谷家伝記」から読める村の草分け分布系統図

奥三河をめぐる文化圏

奥三河は「三遠南信地域」の中央部に位置し、さらには海を越えて伊勢地域とも強いつながりをもつこの地域の南北軸の中核を担っていました。これは縄文時代以降、この一帯の南北をつなぐ基幹軸がベースにあり、それをもたらしたのが中央構造線で、その断層谷が交通上の要路に利用されてきたからです。

中央構造線は、信州の諏訪湖から三遠南信地域を貫き、九州の阿蘇山、さらにはこの4月に発生した熊本地震震源地帯まで続く、日本最長の構造線です。この構造線の谷は、南北をつなぐ自然がつくり出した交通路、街道となり、人々が徒歩や馬、船で情報、物資、文化を運んだ基幹軸となり、奥三河地域にも大きな影響をもたらしました。

諏訪湖方面からは、山の物資や諏訪信仰などの文化が沿岸部へ運ばれ、また三河湾岸や対岸の伊勢からは海の物資や熊野信仰や伊勢信仰の文化が山間地域へ運ばれ、沿路沿いに宿駅を生みだしつつ、それらが三遠南信地域内で交差、混合する形で定着形成されてきました。伝統的な花祭りや雪祭り、田楽など三遠南信地域の今日に高密度で継承される民俗芸能は、このような歴史的南北軸のたまものです。



〈図2〉奥三河をめぐる基幹的南北軸の文化圏